

大学院インターンシップ FD を開催

茨城大学大学院教育学研究科は、専修免許状取得のために、インターンシップやフィールドワークを模索している。平成 25 年度は、附属小・中学校と連携して国語と数学の院生 12 名がインターンシップのトライアルを行った。3 月 4 日に教育学部プレゼンテーションルームにおいて、1 年間の報告と次年度に向けた課題の検討を目的とした FD が開催された。参加者は、大学院教員、附属学校関係者、大学院生の総計 58 名であった。

尾崎久記研究科長の挨拶のあと、小川哲哉大学院専門委員長が、大学院段階の教員養成政策の動向を紹介した。

茨城大学教育学研究科はトライアルとして、前期は全員での観察、後期は自分の視点を定めた個別観察を行い、大学に戻って学校運営の視点から討論する形をとった。これに対して、附属小・中学校からは、教員になって学校はこういうものだと思いつむ前に、学校を大学院生の立場から見るとは良いことであり、観察だけでなく、附属学校へももっとかかわってよいという意見が出された。

大学院生は、観察に基づいて、給食の時間のあり方、掲示物の役割と効果、バス下車後の生徒の行動と校則の関係など学校の現状について率直な意見を述べた。

討論では、現場の先生が気づかないことに気づくことは重要であり、大学はどのように能力育成するかプログラムを検討しなければならない。学校は、院生の問題提起を受け止められるのか。大学院生は、トライアルを行う上でどのような困難に直面し、どんな要望を持っているのかなど、具体的な課題の洗い出しが行われた。

課題として、1、時間割の改定により、学校現場へ出かける時間を確保する。2、留学生、現職派遣教員、教職を目的としない院生等院生の多様化への対応。3、院生が見つけた課題を検討する時間の確保の 3 点があげられ、次年度の課題となった。

今後開設が予定されている教職大学院（平成 28 年度予定）との連携を含めて、この種の FD を継続して行う必要があるだろう。



茨城大学教育学研究科インターンシップFDの様子